

東日本大震災で、家や仕事を失った被災者がアルコール依存症になる懸念が高まっている。喪失感や将来への不安を紛らわせようと飲酒に走るケースが目立つという。早めの対応が必要で、周囲の気付きも求められている。

# 大震災1年

国立病院機構「久里浜アルコール症センター」(神奈川県横須賀市)の精神保健福祉士、藤田さかえさんらは、岩手県内の仮設住宅などを定期的に訪れ、住民たちの飲酒量などをチェックしてきた。

今月訪問したある地域には、昼間から酒を飲み続けるなど深刻な飲酒問題を抱える被災者が9人いた。60代後半〜70代の高齢男性が多く、6人は単身者だ。

「震災後、仕事に就けなかったり、家族や自宅を失ったりした悲しみなどからやりきれない気持ちになって、部屋に閉じこもりがちになる。被災体験のショック、生活が激変したストレスなどをぶつける先が、お酒になっています」と藤田さんは説明する。

アルコール依存症治療の専

## 被災者の飲酒依存 懸念

用病棟を持つ「東北会病院」(仙台市)では、新規患者に占めるアルコール依存症患者の割合が、震災前の3割前後から震災後は4割を超すようになった。津波の被害が大きかった宮城県沿岸部から通う患者もいる。

同病院では、行政の委託などで仮設住宅を回る支援員らに研修を行い、飲酒の問題に

### 患者増 早期対応が大切

対応するノウハウを伝えている。石川達院長は、「アルコール依存症は本人が自覚しにくく、認めたがらないため、なかなか表面化しない。2、3年後に体調を崩して発覚するようでは遅く、支援員など周囲の目で早期に発見することが大切です」と強調する。



被災地の飲酒問題などを防ぐため、岩手県内の仮設住宅を巡る「久里浜アルコール症センター」の職員ら(同センター提供)

宅で孤独死した男性病死者の原因の3割が肝疾患だった。うち、7割がアルコール性と考えられ、多量飲酒やアルコール依存が指摘された。

飲酒を含めた心の問題を解決しようと、岩手、宮城、福島

### 飲酒問題のチェック表

- (久里浜アルコール症センターのホームページより)
- ①飲酒量を減らさなくてはいけないと感じたことがある
  - ②他人に飲酒を非難され、気に障ったことがある
  - ③自分の飲酒について「悪い」「申し訳ない」と感じたことがある
  - ④神経を落ち着かせたり、二日酔いをなおしたりするために「迎え酒」をしたことがある
- ※該当する項目が二つ以上あれば、アルコール依存症が疑われるので、保健所や専門機関に相談を

「お金を酒につき込んでしまおう」といった状況に気付いたときは、保健所や専門病院に相談するといいたいそうだ。

「飲酒によるケンカやトラブルがあった場合も、保健所や相談窓口」に情報を寄せることで、専門家が把握する機会につながりやすい」と藤田さんは話している。